

## 2015年度 第12回ジェンダー史学会年次大会 要旨一覧

### 部会A

#### ◆郭妍琦（広島大学博士課程）

下田歌子の女子教育観の変容——桃夭女学校から実践女学校及び女子工芸学校の草創期まで

明治期の女子教育の基本となった重要な思想の一つに良妻賢母主義がある。これを初めて明確に打ち出したのが、実践女子学園の創立者、下田歌子である（大井三代子 1993：283）。歌子はおよそ20年間にわたる女子教育の中でこの思想を実践しようとした。このような歌子の女子教育がどのように展開されたか、それがどのように「良妻賢母」思想と結びついていたかなどの問題を明らかにするのは、「良妻賢母」思想及び近代女子教育の初期の様相を理解することに役だつと考えられる。そのため、本論は歌子が創設した桃夭学校から、渡欧後に設立した実践女学校の草創期までの教育実践を取り上げて検討したい。

桃夭学校は、近代日本における私学の女子教育機関のモデルとして、大きな意味をもつものである。（実践女子学園一〇〇年史編纂委員会 2001：12）この学校は、政府の高官である伊藤博文や土方久元らの要請を受け、1882年に歌子が自宅で「下田学校」と名付けた私立女学校を設立したことに始まる。同年の6月に歌子は校名を「桃夭学校」と改称した。また1883年に学則を改正し、設置目的と学科課程等の十二方面から学校の形式及内容を整えた。しかし、1885年11月に新たに華族女学校が開設されると、歌子は皇后から要請を受け幹事兼教授に任命され、翌年学監となった。桃夭学校の生徒は新たに入学試験を経て華族女学校に編入されたが、寄宿生徒の一部は夜寄宿舎で歌子の補講を受け、それは一種の塾として機能した。桃夭学校はこうして桃夭女塾と改められ、「設置目的」も改定されて、「本塾ノ趣旨トスルトコロハ、主ラ女子ヲシテ智徳ヲ啓発センメ身神ヲ健全ナラシメ学芸ヲ修メシメ、以テ他日賢母トナリ良妻トナリ可キ性情品性身体ヲ養成スルニアリ」（実践女子学園一〇〇年史編纂委員会 2001：27）とされた。このように、この時点ではまだ「賢母良妻」という四文字の熟語は用いられていないが、歌子の頭の中では「良妻賢母」の雛形が形成されていたと指摘できよう。

しかし、1893年9月に歌子が政府の命を受けて欧米に王室教育の視察に出かけると、桃夭女塾も閉鎖された。二年間の滞欧中に歌子は一般女子教育の必要性を痛感した。帰国後の1898年に彼女は帝国婦人協会を組織し、その会長となった。そしてその最初の教育事業として私立実践女学校及び私立女子工芸学校を開校した。実践女学校は「修身齊家に必須なる実学を教授し、以て賢母良妻を養成する」ことを目的とし、「賢妻良母」の養成が教育目標として掲げられた。一方の女子工芸学校は「処世に必須な

る実学、技芸を教授し、兼ねて自営の道をも講ぜしめる」との主張のもとに実学実践を学ばせることを目的とした。さらに渡欧後の歌子は西欧文明の学習を学生に求める一方で、「東洋女徳の美」をもって近代西欧文化を警戒すべきとも主張した。この一見矛盾した見解を歌子はどのように認識していたのかも議論したい。

このような歌子の女子教育観がどのように変容・発展し、その中で「良妻賢母」思想がどのように形成されたか、そしてそのことから歌子の女子教育が日本近代教育の中でどのように位置づけられるのかを考察したい。

#### ◆山内恵（清泉女子大学）

##### シャーロット・パーキンズ・ギルマンと平和思想

20世紀転換期に活躍したシャーロット・P・ギルマンと言えば、主著『女性と経済』（1898）において、女性の経済的自立を説いたフェミニストの思想家として知る人は多い。しかしギルマンが戦争や平和についてどのように考えていたか、言及されることはほとんどなかった。そこで本報告では、同時代の平和主義者たちとは切り離されてきたギルマンの平和思想に注目してみたい。

彼女と同時代に生きた女性平和主義者といえば、まず思い浮かべるのがジェーン・アダムズである。ノーベル平和賞を受賞した彼女が関わった国際的な女性平和団体に、WILPF（婦人国際平和自由連盟）がある。今からちょうど百年前の1915年、オランダのハーグで開かれた女性国際会議で恒久的な女性による平和組織が議論され、4年後の1919年にWILPFは設立する。この時代にギルマンも自らが創刊、編集、執筆した雑誌、ライフワークとなった『フォアランナー』（1909-1916）がある。その雑誌は短命に終わったが、「フェミニズムの実験室」としてギルマンの多様なフェミニズム思想が織り込まれている。

本報告で注目するのが、主としてこの雑誌で発表された論文やユートピア小説である。女性国際会議が開催された年に書かれた『ハーランド』（1915）、その続編の『我らの世界で彼女と共に』（1916）は、女性の持つ特性「母性」を基本理念とした女だけの平和国家、「ハーランド」を描いている。特に『我らの世界で彼女と共に』（『我らの世界』と略記）は、第一次大戦下のヨーロッパを「ハーランド」に住む女性、エラド一の視点から概観するという手法で描かれる。

雑誌『フォアランナー』は1916年には廃刊に追い込まれるが、1910年代は、活発化していた女性参政権獲得運動から刺激を受け、女性たちは平和運動にも関わるようになった。したがってギルマンもフェミニストの思想家の一人として、戦争とどう向き合うのか、平和を構築するため思想はどうあるべきか、などの議論を発信する場として『フォアランナー』をとらえていたに違いない。

ギルマンは、生涯膨大な数のエッセイ、著書、小説、詩など残したが、自らを思想家と表現し、雑誌で発表した数多くの小説もあくまで思想を伝えるための手段であると説明している。したがって『ハーランド』などのユートピア物語も、ギルマンにとってフィクションではなく、あくまでフェミニズム思想の実践の場、として読むのが妥当であろう。

第一次大戦は人類初の世界を巻き込む凄惨な戦いとなった。女性たちの平和への希求は、アダムズやギルマンに限らず、同時代に生きる人として限りなく深いものであったに違いない。百年を経過した現在もなお、世界に紛争と戦いが絶えることはない。ギルマンのフェミニズム思想に、「平和主義」という新たな光をあて、その可能性をさぐってみたいと思う。

#### ◆楊妍（東北大学博士課程）

1920年代中国の『婦女雑誌』における母性主義説——エレン・ケイ思想の受容を中心に

発表の背景：

『婦女雑誌』は、近代中国における最も長期にわたって刊行された女性誌であり、かつ当時の新女性像を語る上で避けては通れないオピニオン誌であった。本誌は先行研究によって各編集長の在任期間から四つの時期（草創期・成長期・復古期・再興期）に区分されているが、殊に章錫琛が編集長として活躍した「成長期」（1920年～1925年）の言論活動は、特に注目に値する。なぜなら、この時期の『婦女雑誌』は五四新文化運動の影響から従来の「良妻賢母」を理想とした保守的な主張から一新し、当時の日本の婦人運動に絶大な影響をもたらしたエレン・ケイ（Ellen Karolina Sofia Key 1849～1926）の女性思想を積極的に受容した時期に該当するからである。

エレン・ケイは19世紀末から20世紀初頭にかけて女性運動界で活躍したスウェーデンの思想家である。彼女の思想は大きく「児童中心主義」、「恋愛至上主義」、「母性主義」に分けられるが、革新的なケイの思想は当時スウェーデンの保守思想家からは攻撃を受けられ、「不道德の使徒」と批判されていた。

章錫琛は1925年1月の『婦女雑誌』新道德号において「新性道德とは何か」という文章を掲載し、その中で「社会や他人に害を及ぼさなければ、配偶者双方の許可があれば一夫二妻、二夫一妻のような不貞操の形式を帯びたとしても、決して不道德とは見做せない」と言及したが、この「一夫二妻、二夫一妻」の文言が北京大学教授の陳百年を初めとした知識人から批判を受け、様々な議論や論争が展開された。結果的には章錫琛は『婦女雑誌』の編集長を辞職することで事態は収拾したが、この「新性道德」をめぐる論争は近代中国の新女性像を語る上で極めて重要な役割を果たして

いた。

先行研究の概要と課題：

『婦女雑誌』研究の大半は、章錫琛が編集長とした5年間の五四新文化運動時期が注目され、進歩的な女性論の導入において外来思想の受容がいかなる役割を果たしたのか研究が行われている。白水紀子氏の『『婦女雑誌』における新性道德論——エレン・ケイを中心に』では、ケイの女性思想を当時日本や中国に受容された過程を詳しい紹介し、『婦』におけるケイの三大思想の受容をそれぞれ論じている。白水氏は「恋愛至上主義」に関する部分は主に取り上げられているが、ケイの「母性」に関する受容の考察は充分に行われていない。

発表の目的

エレン・ケイは「母性」に最高の価値を置き、全人類にとって最も大切なものは母性の「義務」を果たさなければならないと唱えた一方、幸せな家庭を築くには、子供には安定して暖かい「家庭の雰囲気」という育つ環境を作る必要があると彼女が考えたが、彼女の「母性」思想は『婦女雑誌』ではいかなる反映されたのか。本発表は、「職業」、「教育」、「家庭」という三つ方面からエレン・ケイの母性観の影響を解明したい。

部会 B

◆田中亜以子（京都大学博士課程）

なぜ「女」にとって「恋愛」は「善」とされたのか——明治後期における男性知識人の議論を中心に

「恋愛」とは何か。その答えが時代や文化に規定されることを、恋愛史研究は示してきた。たとえば、「恋愛」を結婚に接続させる恋愛結婚観や、「恋愛」の基礎を男女の排他的な性関係におく価値観は、決して普遍的なものではなく、きわめて近代的なものであるといえる。「恋愛」を異性間に限定し、同性間の「恋愛」を異常視する価値観もまた、然りである。私たちの生は、近代的理念に彩られた「恋愛」という観念によって、一定の方向に水路づけられているのである。そして、その方法と方向は「男」と「女」とで、大きく異なっているように思われる。

私たちの生きる社会において、「恋愛」は明らかに男性文化ではなく女性文化において強い存在感をもっている。ラブ・ストーリーは女性の専売特許であるとされているし、「モテヘア」「モテメイク」「モテ服」など「恋愛」を意識した自分磨きが推奨されるのも女性誌である。「恋愛」が「女」と「男」と結び結ぶべく関係は明らかに異な

っている。しかしながら、このような「恋愛」をめぐるジェンダー秩序の歴史的形成過程を丹念に跡付けようとする研究は、現段階においては手薄であると言わざるを得ない。

このような研究状況にあって重要なのが、大正期の恋愛論を分析した菅野聡美の指摘である。菅野によれば、すでに大正期において「女にとって恋愛がすべて」、「恋愛は女にとってこそ一大事」とする思い込みが、男性知識人たちに共有されていたという（『消費される恋愛論——大正知識人と性』青弓社、2001）。とすれば、大正期におけるこのような自明性は、それ以前の時代において、いかなる過程を辿って構築されたのだろうか。また、明治末には「恋愛」の先駆的实践者である「新しい女」たちが登場している。菅野も指摘する通り、彼女たちには「恋愛＝善」という大前提が共有されていた（同上、181）。そのことは、「恋愛」というものを「女」のにとって重大なものとして位置付ける男性知識人たちの前提とつながっていると考えられる。

本報告では、「女」にとって「恋愛」は「善」であり、かつ、「一大事」であるとする枠組みが登場してきたことの歴史的意味を明らかにするために、明治30 - 40年代に着目し、主として男性知識人による「婦人問題」と「恋愛」をめぐる議論を分析する。

明治30 - 40年代は、社会主義思想が登場し、社会主義の実現という枠組みにおいて「女性解放」が論じられはじめるとともに、『人形の家』をはじめとするイブセン作品が流行し、文学者を中心に「新しい女」が活発に論じられ、「新しい女」の登場が準備された時代である。これらの議論においては、欧米からの生物学的な恋愛観の流入と相俟って、「恋愛」で結ばれた男女関係こそが「自然」でありであり、「男女対等」なものであるとする論理が展開されていく。さらに、「家庭」という言葉を冠した雑誌が流行し、「家庭の幸福」という枠組みにおいても妻に夫の「恋人」であることも求められはじめている。本報告では、これらの流れがいかに相互に関連していたのか、またその背後にいかなる歴史的状況が存在していたのかを明らかにし、「恋愛」がジェンダーと切り結ぶ枠組みがつくられていった様相を探る。

#### ◆乾淑子（東海大学）

揚州周延の美人・典型としてのジェンダー

明治期の錦絵師として高名である揚州周延については、まだ十分に研究されたとは言えないが、当時の絵師の通例として開化絵、役者絵、戦争絵なども当然描いたが、特に美人画を得手としたことで知られる。中でも大きな業績は大奥の暮らしを描いた<千代田の大奥>シリーズと開化期の美人画<真美人>などである。開化期の美人画の中には洋装のものもあり、また美人に限らず周延は洋風の風俗（洋楽演奏、洋服の縫製、洋風の学校など）にも関心の高い作家であった。従来の明治期の美人画研究の

多くは写真、雑誌挿絵、油彩画などをテキストとして用いることが多いが、申請者はより庶民的なメディアである錦絵を題材として、当時の女性観を探ってみようと試みるものである。

とりわけ、明治中期の作品には、江戸時代的な名残を多く残しつつも、新しい文明へと傾斜していく社会の様相が見て取れる。ほとんどの日本人がまだ和服を着用し、あらゆる面で和式の生活をしていた当時の洋風とはわずかなエリートのものにすぎないことも事実である。またその反面、そのような事実はあるながらも人々の視線の先にぶら下がっていた方向性を示すものでもあった。一般的には旧来のジェンダーを指示したように思われている錦絵的な世界の中で表現されたとは言え、その洋風の風俗は女子教育の振興などとも相まってこの時代らしさの一つである。

中でも明治23年に描かれた「現世佳人集」という3枚続きの錦絵に表現された9人の女性の立ち位置、立位か座位か、服飾、アトリビュートなどは実に見事な典型であり、かつ女性が働くことと学ぶことの意味も視野に入っているように思われる。このように整然としたジェンダー表現を可能とした周延という人の思考に与えた社会的な影響も考えると、彼の仲間達、つまり当時の錦絵師という立場は時代の先端を行く実に多種多様な情報へのアクセスが容易であったことに思い至る。錦絵新聞は言うに及ばず、江戸期からそもそも錦絵というメディアは何回も出版停止を宣告されるような時には反社会的であり、時には人々の野卑な好奇心に訴えるものでもあった。

特に、彼が挿絵を描いた改進黨の連載小説『一顰一笑 新粧之佳人』等に描かれた「佳人」の人物像から、この時代における進取の気性に富んだ女性の典型を考える。保守的、改進黨の両方の立場から説かれる婦人改良論、婦人参政権運動との関わり、鹿鳴館的な洋風、慈善活動、明治22年の憲法発布と翌年に開始した議会政治への期待などの中で周延がどのように女性を造形したかを、新聞挿絵・錦絵に描かれた細々した要素の解明から明らかにしたい。

## 部会C

### ◆飯田未希（立命館大学）

#### 美容家の時代 —— 髪結女性の経済的成功と社会的認知の高まり

大正から昭和初期にかけて、女性の美容やファッションについて雑誌や新聞などでアドバイスをする職業的な「美容家」が登場する。彼女たちの多くは日本式の結髪技術を身に着けた髪結や、西洋式の結髪技術および化粧法を学んだ美容師であった。桑島千代子、早見君子、山野千枝子などである。本発表では、なぜこの時期に髪結や美容師を職業とする女性たちが、男性に独占されていたメディアで自分たちの意見を述べることができるようになったのか、その歴史的背景を考えたいと思っている。本発

表では特に以下の2つの問いに答えたい。①髪結いや美容師という職業の女性たちが公領域で彼女たちの意見を述べるに値する権威を持つとみなされるようになったのはなぜか？②美容やファッションが、そもそも公的な場で話し合うに値するとみなされるようになったのはなぜか？この二点は、以下の三つの歴史的コンテキストの中で可能になったのではないかというのが本論の仮説である。

第一に、束髪会以降の男性知識人の言説である。1885年に陸軍医師である渡辺鼎をはじめとする男性知識人によって束髪会が結成されて以降、女性の日本髪が女性の「近代化」を妨げるものとして批判されるようになった。束髪会以降の男性知識人は日本髪を結う髪結を批判のターゲットにしたが、皮肉にも彼らによって女性の髪形(および服装)が女性の近代化に関わる重要な問題として公的な価値を持つに至った。

第二に、明治末から大正中期にかけて、一部の髪結が女性客の間に爆発的な人気を呼び経済的成功を収めた。この時期、束髪会が提案した西洋式結髪法である「束髪」を、髪結が新たに考案してメディアで紹介するようになった。彼女達は美を作り出していくデザイナー的存在として、女性客の間から認知されるようになっていく。またスポンサーがついたイベントなどが開催され、彼女たちの集客力がメディアを通じて再認知された。

第三に、明治末からの高学歴髪結の登場がある。束髪会以降の男性知識人の言説によって特に貶められたのは、髪結達の「品性」であった。高学歴の女性が髪結になったり髪結の学校を作ったりすることで、「髪結」を教育を受けた女性が働く価値のある職業として定義し直す流れが、女性の間から生れた。

明治中期からの束髪会の日本髪批判以降、髪形は女性の「近代化」の指標とみなされ、それとともに日本髪を作る髪結への批判が集中した。これに対し髪結は新しい束髪を考案し、また女性客も髪結女性達を最良として応援するようになった。この中で女性客への髪結の影響力が注目され、化粧品会社や小間物商が髪結と関係を深めるようになった。大正から昭和初期における髪結や美容師の相対的な社会的地位の向上は、髪結女性の経済的影響力に対する社会的認知の高まりによって可能になったのではないかというのが本論の主張である。

#### ◆堀川祐里（中央大学博士課程）

##### 産業報国会と女性指導者——赤松常子を中心に

本報告は産業報国会の女性指導者について、特に赤松常子を中心に分析し、その活動の様子や思想を明らかにするものである。

産業報国会は1938年に産業報国連盟として発足した。労働組合などの既存の労働組織は解散して産業報国会に再編され、1940年の大日本産業報国会の創立を経て、産業

報国会はほぼ全国の工場・事業場を網羅するものとなった。

これまでの産業報国会についての研究は、戦時労働組織が労働組合の解体の上に産業報国会として帰結する諸要因や、産業報国会運動をめぐる政府・産業界・労働界の動向、また戦後の企業別組合との連続・断絶に関して多くの蓄積がある。しかしながら、大日本産業報国会成立以降の産報運動の実態の解明にはまだ課題が残っている。運動の指導機関である産業報国会中央本部の議論は数多くあるものの、中央本部の人的構成のうち女性指導者についての分析は未だ蓄積が少ないのである。中央本部の構成についての主要研究と考えられる塩田咲子（1982）「産業報国会運動の実態と機能」においても女性指導者については触れられていない。

そこで、本報告では、産業報国会中央本部に、初めての女性指導者のひとりとして迎え入れられた赤松常子を中心に、その活動の様子や思想を明らかにしたい。赤松は、1897年に生まれ、大正・昭和を生きた女性運動家であるが、1965年に没してから、その労働運動や政治活動については現在までに数多くの研究や文学作品において断片的に知ることができるものの、赤松常子自体については、その研究はごくわずかでこれまで進展することがなかった。

1940年に日本労働総同盟が解散し、また社会大衆党や社会大衆婦人同盟も解党、解散していくが、赤松はそのころから産報運動にかかわっていくようになる。当時の新聞では、産報に迎えられた赤松らの女性指導者についてとりあげており、本報告では主たる資料として新聞記事を用い、加えて赤松が執筆した雑誌、論文、加えて座談会における発言等を用いて分析を行う。

本報告では、赤松ら産業報国会中央本部の女性指導者たちが行ったさまざまな議論について報告する。特に、中心として扱う赤松の思想についての分析は、戦時下日本の労働観の二つの系統とされる「全体主義的労働観」と「皇国勤労観」の枠組みを視座とする。赤松が出席していたとされる、昭和研究会労働問題研究会の立場とされる「全体主義的労働観」の視点から赤松の言説を分析することにより、赤松の戦時下における労働観を明らかにすることを試みるものである。

#### ◆金慶玉（東京大学博士課程）

##### 戦時期における農村託児所の運営と活動に関する研究

本人は2013年12月ジェンダー史学会第10回年次大会における自由論題報告で、「総力戦体制期における「戦時保育」研究－「戦時託児所」と「保育従事者」を中心に－」というタイトルで総力戦時期の戦時保育について考察を行った。本稿は「戦時期における農村託児所の運営と活動に関する研究」というタイトルで、都市ではなく、農村における託児所の運営と活動を中心にし、託児所をめぐる地域と



学校、女学生との関係を分析する。その事例として津田英学塾が1939年10月に開所して1945年3月まで運営した「津田こどもの家」の開所と運営・活動および、小平という地域における託児所の意味はどういうものであったのかを明らかにすることを目的とする。

戦時期、日本は政治・経済・社会・文化など様々な分野において、大きな変化があった。戦争が長期化するにつれ、前線で戦う男性のかわりに、家を守り、職場を守る女性の銃後の役割が重要性を加え、女性は国の資源として捉えられた。その分、女性の出産と保育という家庭内の問題が国家の未来と関連する、国策に組み込まれて国家は本格的に「戦時期人づくり」の基礎段階に介入するようになった。それに伴い、保育施設は「予備国民学校」「国民幼稚園」「戦時託児所」として注目を集めた。

しかし、農村においては、保育施設に対する農民や母親の反応はあまり肯定的ではなかった。その理由は、貧しい農村の生活で保育料を出すことが苦痛であり、伝統的な家族制度の下では祖母や近所の人も自分の子どものように面倒を見てくれるのに、外国の真似をしてまで外来の保母による託児所に子どもを預けることには抵抗感があったからだ。このような保育施設に対する反感のなかでは失敗の例もあったが、農繁期託児所だけは農民の必要性和一致して短期間に飛躍的に伸びた。また、「津田こどもの家」のように、幼稚園はおろか、託児所も一つもない地域であった小平に開所した託児所が地域と交流し、地域に受け入れられた例もあった。

本稿は、農繁期託児所や季節託児所も食糧の増産のため、女性の労働力を動員する方策として設置され、「保育報国」や「戦時託児所」などの戦時保育が唱えられていたこの時期、農村の託児所はどういう状態であったのかを明らかにする。「津田こども家」を通して、戦時期に小平という地域で農村託児所がどういう過程をへて開所され、運営されたかを検討し、これを通して農村託児所と地域との関係を検討する。また、戦時期に女学生が勤労奉仕として担っていた保育補助の任務がどういうものであったのかも考察する。

#### 部会D

##### ◆高木まどか（成城大学博士課程）

遊女をめぐる客のやりとり——遊女評判記にみられる「差合」から

本発表は、近世の公許遊郭において客として訪れた男性同士の「差合」をめぐるやりとりに着目し、廓において一部の客を排除する取決めが形成された経緯の解明を目的とするものである。

これまで発表者は、近世遊郭に通う客たちが織り成す関係性、およびその背景にある廓の人的構造の究明を目的とし、研究を進めてきた。こういった議論を行なうにあ

たつて特に注目してきたのは、廓における客の身分である。一部の先行研究においては、近世の廓は一般秩序を排した場であり、客の身分も意味をなさなかったとの見解が示されている (\*1)。しかしこの点について検証を行った結果、発表者の注目する遊女評判記 (\*2) には、一部の男性 (役者等) が客となることを拒否された事例がみられた。つまり遊郭においても、廓外の身分秩序は意味をもったのである。更には、排除された客を遊女が好んだ事例がみえること等から、一部の客を排除する取決めは、店や遊女の意向というよりも、むしろ客の意向に沿って行われたであろうことが指摘された。こうした客の排除をめぐるあり方は、廓の人的構造を究明するにあたって注視すべき事柄であるが、これまでの考察においてはその具体的経緯の解明が不足しているという問題点が残されており、本発表はその点の検証を進めるものである。

一部の客が排除された経緯を究明するにあたって、今回注目するのは「差合」である。「差合」とは、『色道大鏡』に「おもひよる傾城をかはんとするに、其女の知音と近付なれば、さし合といひてうらぬ法なり」とあるとおり、買おうとする遊女が自分と見知った間柄の男性の馴染みである場合は、その遊女を買えないという廓の取決めである (\*3)。これは、本来金銭と引換えに得る限られた時間においてしか遊女を独占できない廓において、特異な取決めということが出来る。しかし遊女評判記には、この取決めを破る店や遊女、そしてそれに憤慨する客がみられ、またその一方で、「差合」になる遊女をあえて買おうとする客の姿も散見される。すなわち「差合」からは、客が他客をどう意識し、それに遊女・店がどう関わったかという、客・遊女・店同士の複雑な利害関係をうかがい知ることが出来るのである。また、そのみならず、「差合」は遊女の独占をめぐる客同士の軋轢・劣等感・優越感を浮き彫りにするものでもある。こういった男性同士の軋轢や、客をめぐる利害関係は、一見些細な問題のようにもみえる。しかし実際には、他客を排す論理と密接な関係をもったことが推測され、これらを明らかにすることは、一部の客が排除された経緯を解明する一助となるであろう。

以上のような観点のもと、本発表では近世の遊郭にみられる「差合」およびその論理に着目し、客と客、また客と遊女・店の関係性を析出することによって、廓において一部の客を排除する取決めが形成された経緯の究明を目指すこととしたい。

\*1…西山松之助著『くるわ』、至文堂、昭和38年 他

\*2…遊女評判記とは、寛永から宝暦頃までに発行された仮名草子の一分類で、遊女の品評を主な内容とする類の書を指す (中野三敏著『江戸名物評判記案内』、岩波新書、昭和60年、pp. 22-26)。

\*3…畠山箕山著「色道大鏡 巻第一」 (新版色道大鏡刊行会編『新版色道大鏡』、八木書店、平成18年、pp. 35)

◆小泉友則（総合研究大学院大学博士課程）

日本における“性教育”の源流

日本において、性欲・性交・性病・自慰などの性に関する事柄を年少者に教える、またはそれらが生じないような教育的環境が整えられなければならないとする、いわゆる性教育の議論が誕生したのはいつごろなのだろうか。先行研究においては、その誕生は初中期ごろまでさかのぼることが出来るとされており、そのうえで、性教育なるものが日本において存在感を示し始めるのは、明治後期以降のことであるというのが通説となっている（例えば、高橋一郎「青少年のセクシュアリティと教育」『教育社会学研究第』53集、茂木輝順『性教育の歴史を尋ねる～戦前編』）。

ここで、先行研究において性教育の誕生が語られる際には、西洋的な知の流れを汲む性に関する教育的な議論が日本で紹介されたことをもって、日本において性教育が誕生したと見做されていることを確認しておきたい。発表者はそうした定義を批判するものではないが、しかし、その定義であればもう少し時代をさかのぼり、明治初中期の性教育議論の下支えとなった知識の動きに注目する必要があるのではないかと考える者である。

じつは、西洋の知の流れを汲む性に関する教育的議論・知識というのは、日本においては幕末ごろからは少なくとも出現していた。例えばそれは、ベンジャミン・ホブソン『婦嬰新説 乾』（1859年、管茂材、撰）やC・W・フーフランド『扶氏経験遺訓』（1857年、緒方洪庵、訳）において既にみられる。そのうえで、先行研究でも少し触れられているように、明治初期に「造化機論」類の翻訳性科学書や性科学の知を取り入れた教育書において性教育に関する議論はさまざまなかたちで見られはじめる。

また、明治初中期には、その「造化機論」系なの書籍を子どもの教育に用いるべきといった議論も実は出現しており、先行研究においてはこのような議論の動きは追っておらず、日本の性教育史研究は依然として未整理のままであると言わざるを得ない。

そのため、本発表においては、先行研究が言及の対象とはしてこなかった、上記のような時期の“性教育”関係の議論の流れを追い、性教育の誕生、源流とよびうる動きにあらためて注目する。また、上記で触れた幕末や明治初期の動きが、先行研究の注目してきた明治中期～明治後期の流れにどう合流していくのか／いかないのかについても言及していきたい。以上のように本発表では、日本性教育史の再構築を目指すことを目的としていく。これにより、性教育の歴史だけでなく、現代の私たちのもつ性に関する知識がどこに源流をもつのかといったことの一端も明らかとなるだろう。

◆堀川修平（東京学芸大学博士課程）

日本のセクシュアル・マイノリティ＜運動＞におけるアイデンティティ形成――

## 1980年代の南定四郎による「学習会」活動からみる日本のセクシュアル・マイノリティ〈運動〉の変遷と特徴

本発表の目的は、日本のセクシュアル・マイノリティ〈運動〉が抱えてきた分断と差別という課題を乗り越えるために、〈運動〉と深く結びつきのある「当事者」の「アイデンティティ」(形成)に着目し、「アイデンティティ」(形成)と〈運動〉の目的や方向性、形態がどのように関係し、影響をもたらしたのかを把握することである。〈運動〉とは、一般的に「運動」と言った時に想像される社会運動のみならずコミュニティ形成を含む概念として捉えている。それらをふまえ、本発表は、日本のセクシュアル・マイノリティ〈運動〉の初期に位置づけられる1980年代に行われていた「学習会」活動に着目し、その「学習会」活動の意義と、その後起こった日本のセクシュアル・マイノリティ〈運動〉の変遷とその特徴を明らかにする。

日本のセクシュアル・マイノリティ〈運動〉の初期段階であったと考えられる「学習会」においては、「社会変革のためには、まず自分が何者なのか」、つまり、参加者自身におけるセクシュアル・マイノリティとしての「アイデンティティ」について学ぶことが目的として掲げられていた。本発表で着目するこの「学習会」活動は、南定四郎によってはじめられたセクシュアル・マイノリティ(中でも主に同性愛男性)に向けて1984年から10年間続けられた〈運動〉である。南定四郎は1931年、権太大大泊町に生まれ、1972年(株)砦出版を創立し、月刊雑誌『ADON』(ゲイ向け雑誌)を創刊している(1996年廃刊)。南は、1994年8月28日に日本で初めて行われたセクシュアル・マイノリティの大規模なパレードである「第1回レズビアン・ゲイパレード」を実行委員長という立場から牽引しているが、そのパレードに至る前提として、本発表で着目する「学習会」活動があったと南は述べる。つまり、彼の〈運動〉観が少なくとも今日に続く日本のセクシュアル・マイノリティ〈運動〉に影響を与えていると考えられる。

このように、「学習会」活動は、「アイデンティティ」の形成を目的として掲げられていたのである。また、その「学習会」で学んだものたちが、のちに〈運動〉を牽引していく。アカー(動くゲイとレズビアンの会)はその例の一つであり、「府中青年の家事件」(1991年)や『広辞苑』第3版の「同性愛」に対する記述変更(1991年)などの〈運動〉を起こし、発展している。

「アイデンティティ」の問題は、〈運動〉を成立させる上で重要であり、また逆に、〈運動〉内に分断を引き起こし、場合によっては「当事者」内で差別を生み出すこともある。〈運動〉内における差別と分断の構造を明らかにするためにも、「アイデンティティ」に着目することは必須である。

日本のセクシュアル・マイノリティ〈運動〉に関しては、個々の事例を検討するも

のは過去にも見られているが、それぞれの関係などに着目して変遷を追ったものは未だ見られておらず、発表者はその点に着目して研究を続けている。歴史的な流れを把握することは、〈運動〉の今後の方向性を捉えることにもつながっていると考え、このような問題意識から、本発表では初期の〈運動〉であった「学習会」活動に着目し、これらの〈運動〉の意義とそれに続く〈運動〉の方向性について分析したい。